

学校選択制について考える（２）――「前橋ショック」

学校選択制度の見直しへの転換点となった前橋市での学校選択制廃止に向けた経過です。ここに問題点が明瞭に現れています。

■前橋市教育委員会は、2004年度から学校選択制を実施しました。

しかし、2007年11月には、前橋市教委は「前橋市立小中学校の適正規模及び適正配置について」の中で、

「学校選択制を導入して以来4年が経過し、安全面の確保や地域自治体・子ども会育成会との関係、通学区域による通学距離の問題、受け入れ枠を越えた抽選者への配慮、及び市内転居の取扱等、いくつかの問題が生じてきている」

と指摘し、学校選択制の見直しに踏み出しました。

■2008年10月には、前橋市教委は「学校選択制見直しの基本方針」を出し、2011年度から学校選択制を廃止することを決めました。

◇「学校選択制見直しの基本方針」に記載された学校選択制の問題点

http://www.city.maebashi.gunma.jp/kurashi/230/231/234/238/p003249_d/fil/housin.pdf

学校選択制の導入後、5年が経過する中で、利用者は増えている一方で、下記のような課題が生じている。

（１）地域自治会・子ども会育成会等、居住地域との関係の希薄化

学校選択制を活用した児童生徒は学校での友人関係や学校行事との兼ね合いから、居住地の子供会や自治会、地域の健全育成団体等の行事に参加する状況が少ないとともに、通学している学校区の地域の行事にも参加することが少なく、児童生徒と地域との関係の希薄化が指摘されている。また、学校教育を充実させる上でも地域の教育力の支援は欠かすことができない。したがって、子どもたちと地域との関係の希薄化は改善すべき課題と言える。

（２）登下校の安全面の確保の困難化

指定された学校区域以外から、学校選択制で希望した学校へ通学するため、通学区域内のウォーキングバスの利用が難しいとともに、地域での見守りも十分にできないなど、登下校の際の安全面の確保が困難となっている。また、4キロメートル、6キロメートルという距離の妥当性を見直す必要がある。長距離から通学する児童は、個人的な送迎が増加することになり、学校周辺の事故対策の必要性が生じている。

（３）生徒数の偏りの発生

学校選択制の活用により、決まった特定の学校の生徒が減少している中学校の実態がある。こうした状況により、該当校では生徒数が大幅に減少し、望ましい学習環境が確保できなかったり、教科担任制等の学校経営上で支障が生じたり、部活動が成立し得ないで淋しい思いをしている生徒がいたりする。学校では生徒数の減少を防ごうと努力をしており、成果もあげてきているが、こうした生徒数の減少の流れを止めることは難しい。

(4) 学校選択制導入の目的から外れた状況の存在

学校選択制の導入のねらいは1ページの(前橋市)①②③の3つの大きなねらいを持ったものであったが、そうしたねらいによった選択となっていない状況が一部に見られる。例えば、学習状況や生徒指導面の噂や風聞による選択となってしまうことや、中高一貫校の受験や附属中学校受験の予防策ともいえるような事例がある。

(5) その他

①受け入れ枠を超えた抽選者への配慮

兄弟、姉妹等が別々の学校に通うという問題への対応

②市内転居の場合の取扱

学校選択は1回のみとしたことにより生じた問題

(学校選択を1回にだけと限定したことにより、就学後に市内転居すると最も近い学校を選択できない事例が生じた)

4 学校選択制見直しの基本的考え方

学校選択制については、前述のように成果を得た一方、様々な課題も生じている。なお、子どもたちは地域によって生まれ、各学校の教育風土(校風)も地域との連携の中から醸し出され、引き継がれてきたものである。子どもたち、学校にとって、地域は大切な役割を果たし、今後も地域の果たす役割は大きく、地域の教育力を高めることは現代社会の大きな要請でもある。そこで、平成22年度入学者をもって学校選択制は廃止することとする。・・・

■ 2008年の前橋市の決断は、文科省に大きな衝撃を与え、「前橋ショック」と言われ、全国的な学校選択制見直しに向けた転換点となりました。

その間、マスコミでは前橋市の学校選択についていくつかの報道がされています。ここからも学校選択の問題点がよく分かります。

◇新教育の森 風評で入学者減り、特色作り報われず

小規模校受難…学校選択制度廃止決めた前橋市 2008年10月27日毎日新聞

▽前橋市は全国で初めて、学校選択制度を廃止する。導入から4年半、特定の中学校に生

徒が集まり、生徒数の偏りが無視できなくなった。地域との関係が薄れ、メリットより課題が大きくなったゆえの決断だった。【山本紀子】

部活や授業にしわ寄せ

ある市立中では04年の選択制導入後、生徒が150人も減った。「野球部に9人そろわなくなり、試合に陸上部の選手を借りたこともある。今年は近くの中学と合同練習を始め、統一チームで試合に臨んだけれど士気は今一つでした」

校長は振り返る。10年ほど前に荒れた時期があったためか、年々入学者が減った。部活動は停滞し、野球好きの男子は近隣の中学に流れた。

授業への影響もある。生徒減に伴って教員も減らされ、複数の教員が教えるチームティーチングで、技術の先生が数学の教室に入ることも。保護者から「専門でないのに」と苦情も出た。

1年生は40人を少し上回り2クラスがやっとの人数だ。「本当は4クラスが理想。毎年のクラス替えで新しい人間関係を作りたいけれど……」と校長はため息をつく。

風評を抑え、ありのままの姿を地域に伝えたい。そう考えた校長は学校通信を地域の回覧板に載せた。全国学力テストの成績は学校評議員に知らせた。県平均を上回る科目が多い。農家の協力で大根作りを授業に取り入れるなど、地域との連携も重視している。生徒指導では毎朝、靴箱を見回り、来ていない子にすぐ連絡をとる。不登校はない。

校長は切々と訴えた。「あの学校はよくないと言われるが、どこが悪いのか。ちゃんと見た上で言ってほしい」

活気ある伝統校人気

一方、生徒数が3割増えた市立第五中。市中心部の静かな住宅街にあり、交通の便もよい。陸上部は県トップレベルで、卓球部も関東大会に出場、全国学力テストの成績も県平均より上だ。

教室にはぎっしりと生徒が詰まる。1年生女子は「伝統校だからいいと思った。友達も作りやすい」。学区外から選択制で入学した生徒の割合は、3年生で21%、2年生で24%、1年生で30%と年々増えている。

桐生直校長は「自転車通学が多く、安全面が少し不安」と話す。「新しいマンションも近くに建ち、さらに生徒が増えそう。少人数授業で二つ分の教室を使う教科もあるので、教室不足が心配です」

地元行事から疎遠に

前橋市の学校選択制の利用者は年々増え、1年目の160人から今年度は421人に達した。一方、特定の中学で生徒数の増減が著しくなり、改革を重ねても減少を食い止められなくなった。

別の学区に通う子が地元の行事に顔を出しにくくなる現象も生じ、自治会から苦情も届

き始めた。同市後閑町で自治会長を務める村田良治さん（57）は「お墓で肝試しをする夏祭りや、みこしをかつぐ秋の農業祭もあるのに、顔見知りの子が出られず可哀そう。中学校に貸した田んぼで田植えなどをするが、地元の子が農村部ならではの体験をできないのもさみしい」と話す。

こうした状況から市は「学校にとって地域の果たす役割は大きい」と、10年4月入学者を最後に廃止を決めた。市教委の清水弘己・学校教育課長は語る。「大人数の学校は校庭が狭くなりプールも順番待ち。大きいならではの悩みもある」。選択制のよい点は各校がカリキュラムに工夫をこらすようになったことだという。しかし「読書やドリルに力を入れても、それで選ばれることはほとんどないのです」と清水課長は苦笑した。

全自治体の約1割が導入

学校選択制度は、規制緩和のため97年に旧文部省が通学区域の弾力的運用を認める通知を出し、各地に広まった。06年の文部科学省調査では、全国で約1割の自治体が導入している。28市区が導入する東京都内では、学校を自由に選べる制度をとる自治体が多く、学校間の人数の偏りが顕在化。入学率（校区内で住民登録している就学者数に対する入学者数の割合）に大きな差が出ている。

導入の目的と実態、ずれている ― 嶺井正也・専修大教授

学校選択制度の実情を調べている専修大の嶺井正也教授に現状を聞いた。

公教育の質を上げるため導入されたが、教育内容で選択する人は少なく、目的と実態がずれている。また、選ばれる学校とそうでない学校が固定化され、逆転は難しい。

文教地区にあり部活も盛んな伝統校が好まれ、小規模校は避けられることが多い。選択基準は東京でも金沢市や広島市でも同じ傾向だ。荒れなどのうわさは、昔のことだったり実態がない場合も多いが、教員の努力でぬぐい去るのは難しい。

先生たちは学校の特色作りに懸命だが、その努力は報われにくい。品川区の教員は、新校舎で人気の小学校の近くで苦勞しており「校舎やグラウンドを整備して条件を均一にしてほしい」とぼやいていた。地元に住んでいない子どもへの家庭訪問や生徒指導も苦勞が多いと思う。

自由に選べる方がいい、という世の中の風潮があり、存続を望む保護者は多いと思う。しかし、極端な人数の偏りは好ましくない。前橋市は現実をよく見据えた英断をしたと思う。

◆ 続出続き部活・行事支障 前橋市

2011年12月22日 朝日新聞

04年度から小中学校で選択制を始めた前橋市でも同じことが起きていた。大規模校に人氣が集中したため「小規模校では学校運営が成り立たない状態になった」（市教委）。

ある小規模校は200人から122人に。「大型ショッピングモールに客を奪われる商店主

のような気持ちだった」（当時の校長。運動会は別の中学校に混ぜてもらってようやく開催。運動部は3、4種しか維持できず」1人の教師が学ぶ分野の異なる全学年を同時に教えねばならなかった。「義務教育なのに、教育を提供する側がこんな格差を認めていいのかと思った」と元校長は振り返る。